

## 新座写真歳時記－芒種の頃

田も畑も忙しくなりし芒種かな（細木 芒角星）

芒種とは聴きなれない言葉である。又調べて見た。芒（のぎ）とは麦や稲などの穂先にある針のような毛のことだと解った。この頃は麦を収穫して、田植えを始める時期にあたるためこう呼ぶことになった。「芒ある穀物、穫種する時なればなり」と暦便覧にある。いずれにしてもこの頃には梅雨に入るのだが、今年は例年より早く既に入梅が発表されていた。



新座には水田が無い。黒目川、柳瀬川流域には古来から水田があり、多数の遺跡も見つかっている。両川を見下ろす形になるこの地には、灌漑の類も存在しない。生活に必要な水が身近になったのは、野火止用水完成以後ということになる。富士・浅間の火山灰と豊富な落葉により野菜を育てるには適した土壌だったのが幸いし、野火止用水は灌漑・生活用水として新座農業を支えてきた。今や用水は実用的な役割を終えているが、新座を語るに忘れてならないものである。一部は復元され四季折々のたたずまいを楽しませてくれる。復元箇所を増やし、せせらぎに親しむ機会がもっと欲しいと思うのは高望みだろうか？身近な緑が年々減少するのを見るにつけ、そのような気持ちが強くなってくる。

梅雨の晴れ間の日、寄り道の後いつものファームに向かった。サツマイモの苗が整然と並び、里芋は順調な成長の姿を見せている。ジャガイモはそろそろ収穫期に入るようだ。夏野菜の区画に入るとトマト、トウモロコシなどが早くも沢山の実をつけていた。露地物を見ると、子どもの頃近所のトマト畑で失敬したあの味を思い出す。郷愁は味覚と共にある。



とにかく今は物全てが成長の途上にあり、周りの木々の緑も青年期にかかったかのような美しさである。梅雨の雨をうけ徐々に深い緑に変わり、夏の暑さをさえぎる日除けとなる。自然は次の季節への準備を着実に進めていた。遅い昼食を済ませひよいと見ると、ファームではジャガイモの取り入れをする一家の姿があった。

今日の寄り道は「ひまわり畑」の種蒔きだった。春に菜の花まつりをする本多の森に、夏イベントのためボランティアの連中が集まった。「ひまわりの迷路」を作り子どもたちに遊んでもらおうという魂胆である。春の菜の花、夏の向日葵を当地の売り物にすべく参加した。初めて農業



の大変さを実感した。40名ほどが各区画に種を埋め軽く押さえる。それだけの作業を3時間。陽射しもない中の作業は過酷、冗談で「死ぬかと思った」と口をついて出た。市役所差し入れの水（新座森透水）の美味



かったことを記しておく。農作業を舐めていた。同じ姿勢で単純作業を続けることの大変さは、経験して初めて判る苦痛である。明日は足腰の痛みで、歯を食いしばるだろうと予測できた。彼方で作業中の一家に敬意を表しつつ帰途につく。

梅の葉陰の沢山の実が、うっすらと色付きはじめ入梅を告げている。ここしばらくは鬱陶しい毎日が続くことであろう。

梅の実の朝曇りせるはしづかなり（水原 秋櫻子）